



水稻有機栽培実践マニュアル

「Ver.1 【水稻抑草ロボットおよび乗用型除草機を活用した水稻の有機栽培技術編】」



令和7（2025）年2月

鯨川村ゆうきの郷土（さと）づくり検討会

あ い さ つ

鮫川村では、令和7年11月に、里山景観や清らかな水、生物多様性を村の宝として守り、たい肥などの地域資源を活かした環境保全型農業を推進することにより、村民が健康で心豊かに暮らせる持続可能な村づくりを目指す「オーガニックビレッジ宣言」を行いました。本マニュアルは、その宣言の実現に向け、有機農業の取組を具体的な行動へとつなげるための一環として作成したものです。

有機農業、とりわけ水稻の有機栽培は、化学合成農薬や化学肥料に依存しない栽培体系であるがゆえに、雑草対策や労働負担の面で高い技術力と工夫が求められます。そのため、現場に即した技術や実践的な手法の整理が重要となっています。

こうした課題に対応するため、実際のほ場において、水稻抑草ロボットや乗用型水田除草機といった新たな技術を活用しながら、有機水稻栽培の可能性について実証を行ってきました。本マニュアルには、その実証を通じて得られた成果に加え、作業上の留意点や改善すべき課題についても整理しています。

オーガニックビレッジ宣言を単なる理念にとどめることなく、地域の農業として着実に根付かせていくためには、現場で活用できる具体的な情報の共有が不可欠です。本マニュアルが、有機水稻栽培に挑戦しようとする生産者の皆様にとっての実践的な手引きとなり、鮫川村における有機農業の裾野を広げる一助となることを期待しております。

今後も、関係機関や生産者の皆様と緊密に連携しながら、有機農業の実践を通じて地域の農業基盤の強化と環境保全の両立を図り、持続可能な農業の実現に向けた取組を進めてまいります。オーガニックビレッジ宣言の趣旨を共有し、次代につなげる農業をともに育んでいくため、本マニュアルを活用しながら、地域一体となって有機農業の取組を進めていきましょう。

鮫川村ゆうきの郷土づくり検討会
会 長 板 垣 良 夫

目 次

水稻有機栽培実践マニュアル【水稻抑草ロボットおよび乗用型水田除草機を活用した水稻の有機栽培技術編】の基本的な考え方	3
水稻抑草ロボット「IGAM 2」を活用した雑草対策の方法	3
乗用型水田除草機「J」1」を活用した雑草対策の方法	5
1 秋の耕耘・土づくり	9
2 種子消毒（温湯消毒）	10
(1) 種子消毒	10
(2) 浸種、催芽	10
3 播種・育苗	11
(1) 培土の準備	11
(2) 播種	11
(3) 育苗	12
4 基肥の施用・耕耘	14
5 代かき	15
6 田植え	16
7 抑草・除草	17
(1) 水田抑草ロボット「IGAM 2」を用いた抑草	17
(2) 乗用除草機「J」1」を用いた除草	19
8 中干しとその後の水管理、収穫	22
9 ラジコン草刈機の効果実証	26

水稻有機栽培マニュアル

「Ver.1 【水稻抑草ロボットおよび乗用型水田除草機を活用した 水稻の有機栽培技術編】」の基本的な考え方

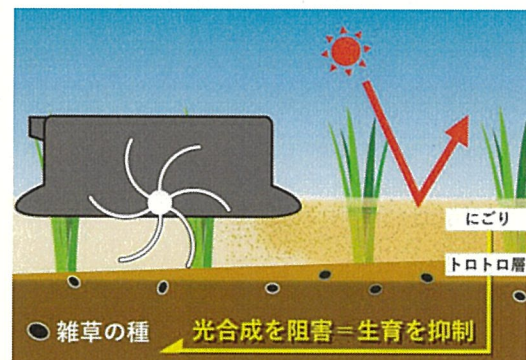
水稻抑草ロボット「IGAM2」を活用した雑草対策の方法

水稻有機栽培では化学合成除草剤を使用しないため代かき後から除草剤を代替できる雑草対策技術の導入が不可欠です。

水稻抑草ロボット「IGAM2」は、自動で水田全体を縦横無尽に走り回り水を濁らせることで、雑草の光合成が妨げられ生育が抑制されます。

■ 水稻抑草ロボット「IGAM2」の特徴

- ① 太陽光のエネルギーで稼働するため、燃料の補給が不要です。天候に応じて充電を行い連続稼働します。
- ② 自動航行システムにより、あぜにぶつかった位置情報をもとにほ場の形状を自動で学習し、未航行エリアを検知



しながら航行し、ほ場全体をカバーします。そのため、鯨川村のような中山間地の小区画や不整形の水田でも稼働させることができます。

- ③ 水田に浮かべて稲の上を縦横無尽に動き回るため、条間、株間の雑草をまんべんなく抑草します。

- ④ 軽量（重量 6 kg）でコンパクトなサイズ（長さ 900×幅 810×高さ 253(mm)）のため、ひとりで簡単に持ち上げられ、水田への出し入れや運搬が容易です。
- ⑤ 水田に浮かべて電源スイッチを入れるだけで、すぐに稼働できます。



■ 水稻抑草ロボット「IGAM2」使用上の注意点

- ① 水面に浮かんで稼働するため、5～10cm の水位を維持することが必要です。そのために、田植えから中干しまでの期間に水位の維持が可能なほ場を選定する必要があります。
- ② 水の濁りで雑草の生育を抑えるため、田植え後できるだけ早く稼働させることが有効です。そのため、5～10cm の水位で水没しない草丈があり、かつ田植え後に速やかに活着する、根量が多い健苗を育成する必要があります。
- ③ 苗は中苗～成苗とし、育苗期には水管理や温度管理を徹底し、徒長を防ぎながら丈夫で健全な苗を準備しましょう。
- ④ 1日当たりの稼働時間の目安は、ロボット投入後1週間程度は1時間/10a、以降は最大2時間/10a までとされています。小区画の水田間でロボットを移動させながら稼働させる場合は、水田面積に応じた稼働時間を設定する必要があります。

乗用型水田除草機「JJ1」を活用した雑草対策の方法

水稻有機栽培では化学合成除草剤を使用しないため代かき後から除草剤を代替できる雑草対策技術の導入が不可欠です。

これまでも、水稻有機栽培では雑草発生初期から「かぎ爪」で条間を攪拌して除草する除草機を使用した除草が実施されてきましたが、歩行型の除草機では水田内を押しながら歩行するため労働強度が大きい、大型の乗用除草機では鮫川村のような中山間地の小区画や不整形の水田では旋回が困難である等の課題があります。乗用除草機「JJ1、MS730」は、小型の乗用除草機で小区画や不整形の水田で容易に機械除草を行うことが可能です。

■乗用型水田除草機「JJ1、MS730」の特徴

- ① 車体がコンパクト(全長2,530 ×全幅2,070 ×全高81(mm))で旋回が容易です。
- ② 車体重量が82kgと軽量で離れた水田間でも軽トラックで運搬することができます。



■ 乗用型水田除草機「JJ1、MS730」使用上の注意点

- ① 乗用型水田除草機「JJ1、MS730」の適応条間 30cm に田植機の条間をできるだけ正確に合わせて田植えを行います。
- ② 田植え後 15～20 日後に 1 回目の除草を行います。苗が活着して根が伸長し条間を攪拌しても稲が倒れない状態になっていることが必要です。
- ③ 育苗期には水管理や温度管理を徹底し、徒長を防ぎながら丈夫で健全な苗を準備しましょう。順調な活着が見込める気象条件で田植えを行うことが必要です。

各時期の栽培管理のポイントは下表のとおりです。

項 目	時 期	作 業
1 秋の耕耘・土づくり	10～11 月	10 月～11 月の秋期に、米ぬかの入った発酵肥料などの有機質肥料、堆肥を施用することで稲わらの分解を早め、微生物による土づくりが促進され、地力増進につながります。
2 種子消毒	4 月	(1) 種子消毒 毎年種子を更新するため、未消毒種子を購入します。健全で充実した種子を確保するため、比重 1.13 (水 10ℓ 当たり食塩 2.1kg) で塩水選を行い選別します。 (2) 浸種、催芽 60℃の温湯に 10 分間浸漬後、直ちに冷水に入れ、粳の温度を 20℃以下に下げます。 浸種は 10～15℃で 10 日程度行います。芽を出した種子が 1 粒でもあれば催芽に入ります。種粳がハト胸状態になったら、脱水機で水切りをして播種します。
3 播種・育苗	4 月～6 月	(1) 培土の準備 十分に発酵した有機質肥料と粒状赤土を混合した培土や、市販の有機水稲用培土を使用する方法などがあります。 (2) 播種 田植え後速やかに活着する茎が太く根張りの

		良好な健苗を育成するため、マットの場合は乾籾 80g/箱以下、ポットの場合は乾籾 40g/箱（2～3 粒/ポット）とします。特に、抑草ロボットを使用する場合は、田植え直後でも 5～10cm の水位で水没しない草丈があり、かつ田植え後に速やかに活着する、根量が多い健苗を育成するため、薄まきとすることが必要です （3）育苗 健苗を育成するための育苗法として、置床に育苗箱を並べてプール育苗を行う方法、ハウス内に置床を作り育苗箱を並べて灌水しながら育苗する方法などがあります。いずれの方法でも、気温や水温、培土の水分を確認しながら徒長しない健苗を育成します。
4 基肥の施用・耕耘	4 月	大豆由来の有機物肥料、自家製ぼかし肥料などを散布し、浅く耕耘します。施肥前に土壌分析を行い、不足している養分に見合う量の肥料を投入します。 なお、使用する肥料は、有機 J A S 認証に適合したものを使用します。
5 代かき（1回目）	4 月	まず、4 月中下旬に水位 5 cm 以上を維持するよう湛水します。この時期に、1 回目の代かきを行います。
6 代かき（2回目）	田 植 え 3 日 前	田植え 3 日前に水位 10cm 程度で代かきし、発生したコナギやヒエ等を除去するとともに、コナギ等の種子をトロトロ層で覆います。
7 田植え	5 月 下 旬 ～ 6 月 上 旬	1 株当たり 1～3 本の 4.5～5.5 葉に成長した成苗を、18 株/㎡（30cm×18cm）以下でできる限り浅植えします。疎植は、病虫害や冷害に耐性を持たせるとともに、ヒエ防除や水稻抑草ロボット「IGAM2」稼働のための深水管理を可能にします。
8 抑草・除草	6 月～7 月	水田抑草ロボット「IGAM2」を用いた抑草や乗用除草機「J J 1」を用いた除草を行います。 （1）水田抑草ロボット「IGAM2」を用いる場合は田植え後、苗の活着（苗をひっぱっても抜けないこと）を確認して投入し稼働を開始します。投入後 1 週間は 1 時間/10a、以降は最大 2

		時間/10a を目安に、運用します。稼働には5～10cm の水位を維持する必要があるため、水位センサー（水田 farmo など）を活用することで水位管理が容易となります。草丈が 30cm を超え、稲に遮られロボットの動きが鈍くなってきたらロボットを引き上げます。投入からおおよそ3～5 週間が目安です。 （2）乗用除草機「J」J1」を用いる場合は、田植え 15～20 日後の苗が活着し根が十分に張った時点で1 回目の除草に入り、その後雑草の発生状況により、10～15 日後に2 回目、残草が多い場合はさらに 10～15 日後に3 回目の除草を行います。
9 中干しとその後の水管理、収穫		中干しは出穂前 35～25 日からを目安に1 週間程度行います。アミミドロの死滅による養分補給や水田土壌を固め、稲の倒伏を防ぐ効果があります。 中干し後は間断灌水または掛け流しで管理します。 収穫 10 日前には落水し、土を固め、倒伏を防ぎます。 稲穂の黄化状況を確認し、適期に収穫を行います。

1 秋の耕耘・土づくり

10 月～11 月の秋期に、米ぬかが入った発酵肥料などの有機質肥料、堆肥を施用することで稲わらの分解を早め、微生物による土づくりが促進され、地力増進につながります。

- 発酵肥料、有機質肥料、堆肥などを散布し、5 cm 以下の浅い耕起を行います。

⚠ 注意

わらや堆肥などの有機物を深くすき込むと分解が遅れ、夏場に硫化水素やメタンなどが発生し、根腐れやイネドロオウムシ、いもち病などの発生が懸念されるため、耕起は浅く行います。

2 種子消毒（温湯消毒）

（1）種子消毒

毎年種子を更新するため、未消毒種子を購入します。健全で充実した種子を確保するため、比重 1.13（水 10ℓ 当たり食塩 2.1kg）で塩水選を行い選別します。

60℃の温湯に 10 分間浸漬後、直ちに冷水に入れ、粃の温度を 20℃以下に下げます。

■ 実証ほの事例

☞ 種子更新のため 品種「里山のつぶ」の未消毒種子を購入しました。

☞ 4 月 11 日に JA の温湯消毒器で 60℃、10 分間の温湯消毒を行いました。



（2）浸種、催芽

浸種は 10～15℃で 10 日程度行います。芽を出した種子が 1 粒でもあれば催芽に入ります。種粃がハト胸状態になったら、脱水機で水切りをして播種します。

■ 実証ほの事例

☞ 4 月 11 日に浸種を開始し、4 月 18 日に催芽に入り、4 月 19 日に脱水、直後に播種しました。

3 播種・育苗

(1) 培土の準備

十分に発酵した有機質肥料と粒状赤土を混合した培土や、市販の有機水稻用培土を使用する方法などがあります。

■ 実証ほの事例

☞ 成苗ポットに播種し、ポットを置床に並べ育苗したため、無肥料の粒状赤土（エス・ケー焼土）を使用しました。

(2) 播種

田植え後速やかに活着する茎が太く根張りの良好な健苗を育成するため、マットの場合は乾粃 80g/箱以下、ポットの場合は乾粃 40g/箱（2～3粒/ポット）とします。特に、抑草口ポットを使用する場合は、田植え直後でも 5～10cm の水位で水没しない草丈があり、かつ田植え後に速やかに活着する、根量が多い健苗を育成するため、薄まきとすることが必要です。

■ 実証ほの事例

☞ 4月19日に、成苗ポット播種機を使用して2～3粒/ポットとなるよう播種しました。

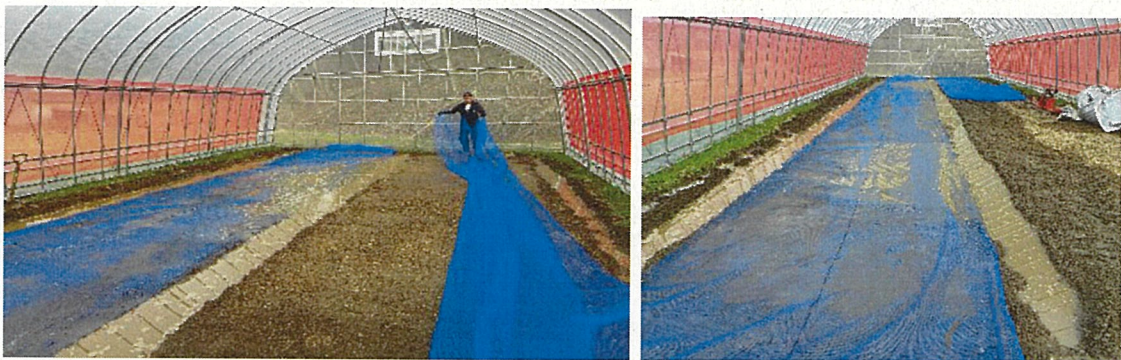


(3) 育苗

健苗を育成するための育苗法として、置床に育苗箱を並べてプール育苗を行う方法、ハウス内に置床を作り育苗箱を並べて灌水しながら育苗する方法などがあります。いずれの方法でも、気温や水温、培土の水分を確認しながら徒長しない健苗を育成します。

■ 実証ほの育苗事例

👁 標高 660m の高冷地での育苗となるため、地温、気温を確保するために、育苗ハウス内に置床を作り、ポットを並べた後、灌水しながら育苗しました。

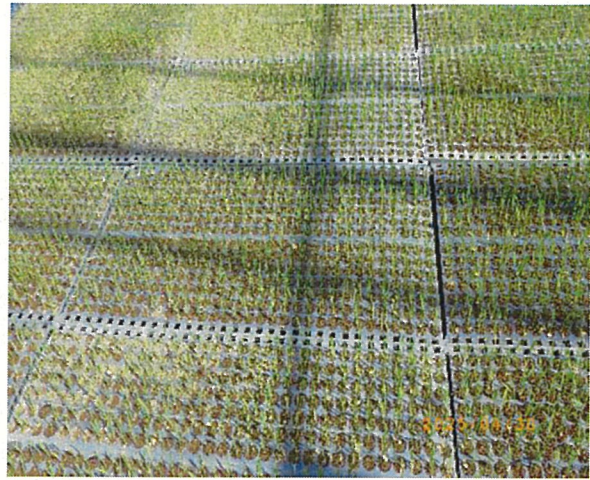
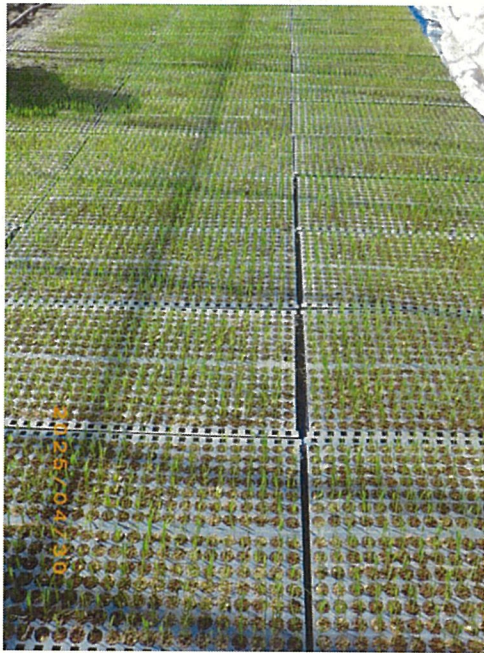


👁 4月19日

置床を作り、自家製ばかし肥料を表面に散布し、根切りネットを敷きました。



置床にポットを並べ、十分灌水した後、シルバーポリでべたがけし保温しました。



4月30日 苗立ちが揃いました。

6月6日 田植え時の苗



苗の生育がやや不揃いで、葉色が淡かったため、葉色を見ながら「エキタン有機特選エース（有機 JAS 適合性評価済み資材 JASOM-170902）」で追肥を行い、苗の生育、葉色を揃えました。

成苗ポット苗の仕上がり



4 基肥の施用・耕耘

大豆由来の有機物肥料、自家製ぼかし肥料などを散布し、浅く耕耘します。施肥前に土壌分析を行い、不足している養分に見合う量の肥料を投入します。なお、使用する肥料は、有機JAS認証に適合したものを使用します。

■ 実証ほの施肥事例

4月1日に、自家製米ぬか大豆くん炭ミネラルペレット肥料150kg/10a（1月に調整）、海水由来の塩化カリ（有機JAS認証適合）を散布し、浅く耕耘しました。

施肥前の土壌分析結果

項	単位	測定値	下限	上限
土性				
密度	mm			
腐植	%		3.00	
全窒素	%			
C/N比				
EC(電気伝導率)	μS/cm	35	200	500
pH(H ₂ O)		5.80	5.80	6.50
pH(KCl)		5.50	5.00	6.00
CEC(塩基交換容量)	me/100g	12.08		
交換性カルシウム	me/100g	6.64	5.56	8.41
交換性マグネシウム	me/100g	1.95	1.57	2.96
交換性カリウム	me/100g	0.11	0.17	1.33
交換性ナトリウム	me/100g	0.03		
塩基飽和度	%	72.02	70.00	100.00
Ca/Mg比		3.41	2.60	3.75
Mg/K比		17.7	2.00	12.5
Ca/K比		60.36	6.50	37.50
有効態リン酸	mg/100g	10	10	100
リン酸吸収係数				
アモニウム態窒素	mg/100g	0.0		
硝酸態窒素	mg/100g	0.0		
熱水抽出ホウ素	ppm	0.80		3.00
DTPA-Fe(鉄)	ppm	4.50		
DTPA-Mn(マンガン)	ppm	1.00		
DTPA-Zn(亜鉛)	ppm	1.00		
DTPA-Cu(銅)	ppm	0.20		

東京農大土壌研式土壌診断システム“みどりくん”

5 代かき

まず、4月中下旬に水位 5 cm 以上を維持するよう湛水します。

この時期に、1 回目の代かきを行います。

田植え 3 日前に水位 10cm 程度で代かきし、発生したコナギやヒエ等を除去するとともに、コナギ等の種子をトロトロ層で覆います。

■ 実証ほの事例

👉 1 回目代かき 4 月 15 日に入水し、4 月 18 日に代かきを行いました。

👉 2 回目代かき 田植え 2 日前の 6 月 3 日に代かきを行いました。

6 田植え

1株当たり1～3本の4.5～5.5葉に成長した成苗を、18株/㎡(30cm×18cm)以下でできる限り浅植えします。疎植は、病虫害や冷害に耐性を持たせるとともに、ヒエ防除や水稻抑草ロボット「IGAM2」稼働のための深水管理を可能にします。

■ 実証ほの事例

👁 6月5日に、成苗ポット田植機「みのるポット成苗田植機 RXD-4」を用いて田植えを行いました。栽植密度は12.6株/㎡(条間33cm×株間24cm)としました。



7 抑草・除草

水田抑草ロボット「IGAM 2」を用いた抑草や乗用除草機「J」1」を用いた除草を行います。

水田抑草ロボット「IGAM 2」を用いる場合は田植え後、苗の活着（苗をひっぱっても抜けないこと）を確認して投入し稼働を開始します。投入後 1 週間は 1 時間/10a、以降は最大 2 時間/10a を目安に、運用します。稼働には 5～10cm の水位を維持する必要があるため、水位センサー（水田 farmo など）を活用することで水位管理が容易となります。草丈が 30cm を超え、稲に遮られロボットの動きが鈍くなってきたらロボットを引き上げます。投入からおおよそ 3～5 週間が目安です。

乗用除草機「J」1」を用いる場合は、田植え 15～20 日後の苗が活着し根が十分に張った時点で 1 回目の除草に入り、その後雑草の発生状況により、10～15 日後に 2 回目、残草が多い場合はさらに 10～15 日後に 3 回目の除草を行います。

■ 実証ほの事例（雑草発生状況、生育状況）

（1）水田抑草ロボット「IGAM 2」を用いた抑草

☞ 田植え 5 日後の 6 月 11 日に、苗の活着（苗を軽く引っ張っても抜けないこと）を確認し、ロボットを投入しました。稼働時間は 2 時間/10a と設定しました。



ロボット投入前
（田面水が澄んで
いました）



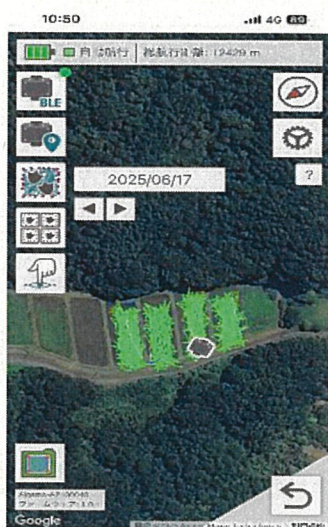
ロボット稼働により水田全体の田面水が濁りました。



稼働の翌朝には田面水が澄んでしまっていたので、毎日、2時間/10aの稼働を継続しました。苗の浮き上がり、倒伏はありませんでした。

⚠注意（重要）

メーカーの活用ガイドによると、ロボット投入後1週間は1時間/10aが稼働の目安で、過剰な稼働は稲への負担となる場合となるとされています。実証ほでの明確な生育への影響は認めませんでしたが、稼働時間は目安を守ることが望ましいと考えます。



ロボットとスマートフォンを連携することにより、航行した軌跡、バッテリー残量の確認、稼働時間のタイマー設定や回収のための呼び戻しなどが可能です。

6月25日（投入14日後） コナギが3～7葉期になっていますが、葉に泥（トロロ層）がかぶっています。



7月3日（投入 22 日後） 水面から出ている雑草はほとんどなく、抑草効果が確認できました。 草丈 47.4cm 茎数 156 本/m² ロボットの動きが悪くなりました。 雑草発生量は 5.5(乾物 g/m²)でした。



👉 7月6日（投入 25 日後）にロボットを引き上げました。

（2）乗用除草機「J」1」を用いた除草

👉 田植え 14 日後の 6 月 20 日に、乗用除草機「J」1」を導入し、除草を行いました。



⚠️ 注意

田植えを条間 33cm で実施したため、乗用除草機の仕様（条間 30cm、6 条）

と合わず、条間を合わせるため外側の「かぎ爪」を取り外し、条間3本ずつの除草となり、作業能率が半分となりました。

乗用除草機を使用する場合は、田植え機の条間と除草機の条間を合わせ、できるだけ正確な条間となるよう田植えを行う必要があります。



除草機走行前 コナギの発生が見られました。



除草機走行後 かぎ爪で条間が攪拌されコナギが浮き上がっていました。

7月3日 条間の雑草はほとんど除草されていましたが、株間にコナギが発生していました。雑草発生量は3.5（乾物 g/m²）でした。



8 中干しとその後の水管理

中干しは出穂前 35～25 日からを目安に 1 週間程度行います。

アミミドロの死滅による養分補給や水田土壌を固め、稲の倒伏を防ぐ効果があります。

中干し後は間断灌水または掛け流しで管理します。

収穫 10 日前には落水し、土を固め、倒伏を防ぎます。

■ 実証ほの事例

7 月 17 日に中干しを開始し、7 月 24 日までの 8 日間実施しました。

中干し終了後は、間断灌水を行いました。

■ 実証ほの事例（中干し後の稲の生育、雑草発生状況）

（1）水田抑草ロボット「IGAM 2」を稼働させた水田

8 月 13 日 穂揃い期を迎えています。条間にコナギが見えますが、開花している株は認めませんでした。草丈 98cm で、稲により条間が遮光され抑草したと考えられます。



雑草発生量は
66（乾物 g/m²）
でした。

9月17日 成熟期（収穫8日前）

雑草は見られませんでした。



（2）乗用除草機「J」1」で除草した水田



8月1日 株間にコナギが発生していますが、開花しているものはありませんでした。



8月13日

除草機が走行しなかった枕地の部分

コナギの成葉が見られますが、これ以上は繁茂しませんでした。

雑草発生量は、210(乾物 g/m²)でした。



8月17日 成熟期（収穫8日前）

雑草は見られませんでした。



9月25日 収穫に至りました。

坪刈り収量		
使用した機械	精玄米重 (kg/10a)	不稔割合(%)
水田抑草ロボット	290	6.0
乗用除草機	384	5.0

※全ほ場からの実収量は約300kg/10a（聞き取りによる）

収量は機械除草区＞アイガモロボ区となりました。要因としてはアイガモロボの稼働時間の過剰による根傷みや、水系が水源（沢）→温水田→アイガモロボ区→機械除草区となっており、水田水温に差異が生じたこと等が想定されます。

玄米千粒重は約25gと大粒で、「里山のつぶ」の特性を顕していました。

9 ラジコン草刈機の効果実証

水稻の有機栽培では、斑点米カメムシの吸汁により汚損粒が発生しやすく、品質低下により大きな被害をもたらします。斑点米カメムシの対策としては、水田の畦畔や法面の雑草を繁茂させないよう6月から8月に定期的に草刈を行い、斑点米カメムシが増殖する場である雑草の草丈を常に低く抑えておくことが有効です。この時期は高温期にあたり、また梅雨期を挟むため、従来の刈り払い機や歩行式草刈機による草刈作業は労働強度が大きく、軽労化が求められていることから、ラジコン草刈機の効果を実証しました。

■ 実証ほの事例

📷 9月2日に、ラジコン草刈機「KAMIKARI (RJ705)」の実証を行いました。



草刈前の畦畔（イネ科雑草が繁茂しています）



ラジコン草刈機を用い、畦畔の奥から手前に草刈を行いました。



草刈後の状態

刈り残しはなく、地面すれすれに草が刈られています。畦畔の左右は、この時期では稲も刈ってしまうため、生産者慣行作業の歩行式草刈機により草刈を行いました。



畦畔の左右は、歩行式草刈機を用いて草刈を行いました。

ラジコン草刈機と歩行式草刈の草刈面積当たりの作業時間、労働強度を比較しました。

使用した機械	作業時間 (秒/m ²)	作業者の疲労、使用時の感想等（聞き取りによる）
ラジコン草刈機	28.2	プロボ（コントローラ）での操作に慣れていないため、走行や旋回時に無駄な操作が多く時間がかかってしまった。プロボを操作しているだけなので、疲労はない。暑い日でも空調服を着るぐらいで作業ができると思う。
歩行式草刈機（生産者慣行）	27.5	草刈機を押すため足腰、背中、腕の力を使い、疲労は大きい。 暑い日の長時間の作業は難しいと思う。休憩時間を考えると、実際の水田1枚分ではもっと時間がかかると思う。

⚠ 注意

ラジコン草刈機は使用できる法面角度が前後 25° 未満、左右 45° 未満、刈幅 700mm であり、使用する場所によっては、刈り払い機や歩行式草刈機との併用が必要になります。また、プロボ（コントローラ）での遠隔操作のため、事前に練習し操作に慣れる必要があります。

ラジコン草刈機を実際の作業場面で効率的に使用するためには、草刈を行う場所の広さ、傾斜などを踏まえて、事前に作業行程を計画しておくことが重要でした。